三野町の社寺建築

――――――――――――――――― 社寺建築班（郷土建築研究会）―――――――――――――――――

黒崎　仁資[*1]　坂口　敏司[*2]　中野　真弘[*3]　富田　眞二[*4]　森兼　三郎[*5]

1．はじめに

三野町は県西部、吉野川北岸に位置し、東は美馬町、西は三好町、北は讃岐山脈の尾根づたいに香川県琴南町と仲南町に接し、南は吉野川を隔てて三加茂町が対岸にある。藩政期には清水（しみず）、加茂野宮、勢力（せいりき）、芝生（しばう）、太刀野（たちの）、太刀野山の六村があったが、明治22年に合併して三野村となり、大正13年に町制が施行されて現在に至っている。

私たち社寺建築班は、7月27日から町内に入り、社寺建築を建築学的見地から神社は28ヵ所、寺院、お堂は7ヵ所を調査し、案内図（後掲の**図7**）を作成し、それぞれの建立年代や建築様式などを一覧表（**表1・2**）にまとめた。そのうち4ヵ所については詳細調査を行い、実測図を作成した。また、9つの社寺から34枚の棟札（むなふだ）を確認することができた。その寸法、年代、大工名等の内容について一覧表にまとめた。

以下、その調査内容について報告する。

2．三野町の社寺建築概要

1）神社建築の概要

神社は28社を調査した、その建築年代については、書籍や棟札等から確認できるもの以外は、建築様式から推測することとする。最も古いものは、芝生の勢力神社本殿（**図1**）で、彫刻の形や、彫りの深さ、使われ方などの様式から判断する限り、江戸中期のものと推測される。また、清水の八幡（はちまん）神社本殿（**図2**）は『阿波の社寺建築』に紹介されており、元禄11年（1698年）に建立されたものであるが、平成8年に大修理がされて、主要構造部である柱と梁など一部を残しているだけで、あとは新しい材料で修繕されていた。この2棟が江戸中期のものである。

江戸末期のものとしては、清水の天（てん）神社本殿（**図3**）が『阿波の社寺建築』に天保6年（1835年）に建立と記載されている。その他の神社は様式から判断する限り、明治以降に建立されたものと考えられる。

図1　勢力神社　本殿

図2　八幡神社　本殿

＊1　黒崎建設　＊2　坂口建築設計室　＊3　真建築都市研究室　＊4　富田建築設計室　＊5　A＋U森兼設計室

本殿の建築様式は、春日造りが太刀野山の出雲神社、入母屋造りが太刀野の松尾神社で、その他の神社は見世棚造りの小社殿を除いて全て流造りであった。規模では、芝生の武大神社本殿と清水の八幡神社本殿が三間社で最も大きく、その他は全て一間社であった。

今回の調査で３つの大きな特徴を見い出すことができた。１つは拝殿のせいがい造りである。これは出し桁造りとも言われ、中央から出た梁を、さらに外壁より持ち出して桁を受け､軒を深くする様式で、太刀野山の川花神社拝殿（**図４**）をはじめ、6社の拝殿に見られた。

２つ目は直線的な肘木である。肘木とは軒を深くするために設けられる、肘の形をした組物のことで、太刀野山の出羽神社本殿（**図５**）をはじめ、７社の本殿に見られた。また、この手法は三野町だけでなく、近隣の半田町の石堂神社本殿や、井川町の馬岡新田神社本殿などでも見られ、馬岡新田神社の棟札により太刀野村の大工が携わったことがわかっており、神社建築という観点からも近隣町村との深い関わりが伺える。

３つ目は台輪が省略されていることがあげられる。台輪とは身舎柱頭部の頭貫上部に設けて横方向をつなぎ、剛性を高めるための材のことで、芝生の武大神社本殿（**図６**）をはじめ、６社の本殿において見られた。

図３　天神社　本殿

２）寺院建築の概要

寺院は５カ寺、お堂は２カ所を調査した、その建築年代について、江戸中期のものは滝寺の方丈で、次に江戸末期のものは滝寺の方丈の右隣につながっている庫裡と鐘楼であった。また、光泉寺の鐘楼が明治７年に建てられている。その他の寺院、お堂は昭和期に改築されたものが多く、様式的には大きな特徴を見い出すことができなかった。

図４　川花神社　拝殿

図５　出羽神社　本殿

図６　武大神社　本殿

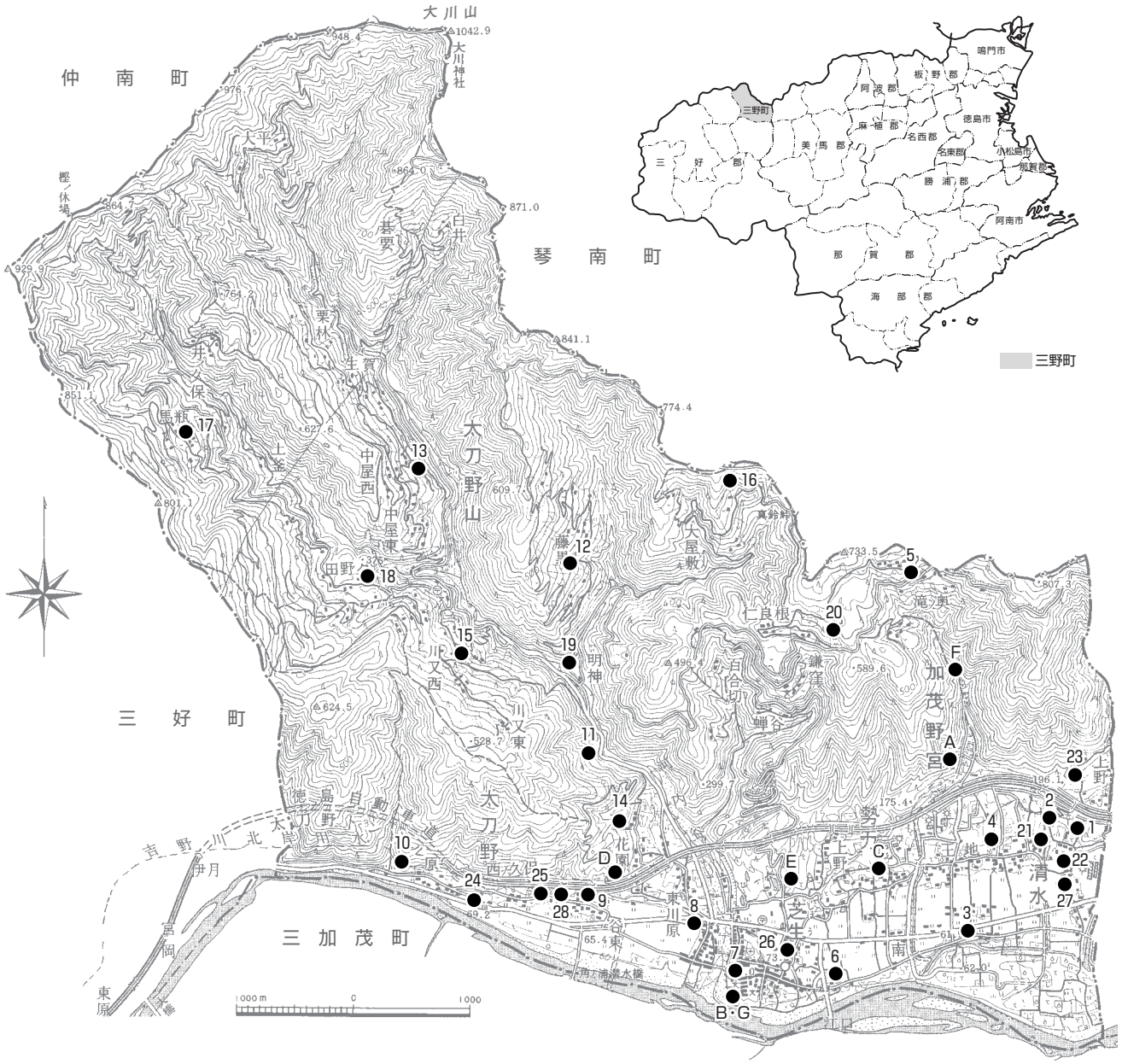

図７　三野町の社寺建築案内図

１．八幡神社	11．出羽神社	21．宮内神社	A．滝寺
２．天神社	12．九柱神社	22．稲荷神社	B．長好寺
３．下加茂神社	13．三所神社	23．山神社	C．青蓮寺
４．熊野十二柱神社	14．奥宮神社	24．西岡神社	D．光泉寺
５．田寸神社	15．川花神社	25．熊野八柱神社	E．来迎寺
６．勢力神社	16．山野神社	26．松尾神社	F．龍頭大師堂
７．武大神社	17．出来神社	27．荒神社	G．愛宕堂
８．八坂神社	18．白石神社	28．五柱神社	
９．松尾神社	19．五柱大明神		
10．日吉神社	20．出雲神社		

表１　神社建築調査一覧表

神　社　名	鎮　座　地	創　建	祭　神	旧社格	鳥居様式（材料）
1　八幡神社 はちまん	清水1077	永正元年（1504）	仲哀天皇　応神天皇　息長足姫命	旧村社	明神（御影）
2　天神社 てん	清水1346	不詳	菅原道真公	旧無格社	明神（御影）文政10年
3　下加茂神社 しもがも	加茂野宮492の2	不詳 明治５年郷社となる	玉依姫命	旧郷社	明神（御影）明治２年
4　熊野十二柱神社 くまのじゅうにばしら	加茂野宮1340	不詳 明治８年村社となる	国常立尊　天照大神 鵜草葺不合尊　彦火火出見命 天津彦火瓊瓊杵尊　天之御柱命 稚皇魂命　月夜見命　軻遇突智命 素戔嗚命　伊邪那岐命　伊邪那美命	旧村社	台輪（ｺﾝｸﾘｰﾄ）
5　田寸神社 たき	加茂野宮1945	不詳	田寸津彦神　田寸津姫神	旧無格社	明神（御影）昭和57年
6　勢力神社 せいりき	芝生87	不詳 明治８年村社となる	大己貴命　少彦名命 猿田彦命	旧村社	明神（御影）大正13年
7　武大神社 ぶだい	芝生1241	不詳 明治８年村社となる	素戔嗚命　稲田姫命	旧村社	明神（御影）安政４年
8　八坂神社	太刀野80	不詳	素戔嗚命	旧無格社	明神（御影）
9　松尾神社 まつお	太刀野997	不詳	大山咋神　市杵島姫　猿田彦命	旧村社	台輪（御影）平成４年
10　日吉神社	太刀野1934	不詳	国常立命　少彦名命　大山祇神	旧無格社	明神（御影）
11　出羽神社 いづは	太刀野山461	不詳 明治８年村社となる	天太玉命　天津児屋根命 埴山姫命	旧村社	明神（御影）大正９年
12　九柱神社 ここのはしら	太刀野山1203	不詳	刺国若姫命　天穂日命　櫛八玉命 八意思兼命　天手力雄命　大国主命 衝立船戸命　大屋津比売命　下照姫命	旧無格社	明神（木造）昭和50年
13　三所神社	太刀野山1774	不詳	田心姫命　湍津姫命　市杵島姫命	旧無格社	明神（御影）
14　奥宮神社	太刀野山2241	不詳	国常立命　伊邪那岐命　国狭槌命	旧無格社	木造
15　川花神社	太刀野山3980	不詳	瀬織津姫命	旧無格社	明神（御影）大正11年
16　山野神社	太刀野山大屋敷	不詳			両部（木造）
17　出来神社	太刀野山馬瓶	不詳			明神（御影）昭和35年
18　白石神社	太刀野山田野々	不詳			明神（木造）
19　五柱大明神	太刀野山川又	不詳			木造
20　出雲神社	太刀野山鎌窪	不詳			明神（木造）
21　宮内神社	清水西ノ東	不詳			台輪（御影）昭和９年
22　稲荷神社	清水北	不詳			
23　山神社	清水上野	不詳			明神（木造）
24　西岡神社	太刀野西ノ久保	不詳			
25　熊野八柱神社	太刀野西ノ久保	不詳			明神（木造）昭和８年
26　松尾神社	芝生中東	不詳			明神（木造）
27　荒神社	清水中	不詳			両部（木造）昭和58年
28　五柱神社	太刀野西ノ久保	不詳			

表２　寺院建築・御堂建築　調査一覧表

寺院名	所在地	開　基	宗　派	山　号	本　尊
A　滝寺	加茂野宮1796		真言宗 御室派	万念山	聖観世音立像（重要文化財）
B　長好寺	芝生1178-2	不詳	真言宗 滝寺末		地蔵菩薩
C　青蓮寺	勢力695	養老３年（719）	真言宗 御室派	七宝山	毘沙門天王
D　光泉寺	太刀野山144		浄土真宗	飛龍山	阿弥陀如来立像
E　来迎寺	芝生字芝生上	不詳	真言宗古義派 成願寺末		阿弥陀如来坐像
F　龍頭大師堂	加茂野宮の金剛の滝の上	不詳			弘法大師坐像
G　愛宕堂	芝生字萱野（長好寺境内）	天明８年（1788）			勝軍地蔵

平成14年８月末日現在

本殿　建築様式	拝殿　建築様式　向拝	特記事項	A	B	C	D	E
木造 三間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝:入母屋造 銅板葺	裏面は二間社　　彩色の痕跡有り	○			○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝:入母屋造 銅板葺	『阿波の寺社建築』に天保６年（1835）建立と記述				○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝:入母屋造 銅板葺	本殿修理　昭和57年				○	
木造 一間社流造 銅板葺	鉄骨造 切妻造 銅版葺 向拝:縋破風 銅板葺					○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 桟瓦葺		○			○	○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋桟瓦葺 向拝:入母屋造 桟瓦葺	本殿は江戸中期と考えられる 昭和55年　本殿葺替　　平成３年拝殿、幣殿改築	○			○	
木造 三間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝:入母屋造 銅板葺	八社を合祀した 手水舎　木造　昭和57年	○	○		彫	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺			○	○	彫	
木造 一間社入母屋造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺 向拝:入母屋造 銅板葺					○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺			○		○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺			○		○	○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 桟瓦葺 昭和26年		○			○	○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 本瓦葺			○		彫	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺	棟札14枚　最古は元禄年間　現在のものは明治27年		○		○	○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 銅板葺	棟札１枚　昭和18年				彫	○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造 桟瓦葺						○
木造 一間社流造 銅板葺	木造 切妻造						
木造 一間社流造 銅板葺	集会所を兼ねる	棟札９枚 最古は元禄８年（1695）現在のものは明治34年（1901）				○	
木造 一間社流造	木造 切妻造 桟瓦葺		○				
木造 一間社春日造 銅板葺	木造 片入母屋造妻入 桟瓦葺	本殿は江戸末期と考えられる。老朽化が激しい			○	○	
木造 一間社流造 銅板葺	木造 入母屋造 桟瓦葺 向拝:入母屋造 桟瓦葺			○		彫	
鉄骨 一間社見世棚造							
木造 一間社見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 桟瓦葺	棟札１枚					
木造 一間社見世棚造 銅板葺	木造 入母屋造 桟瓦葺 向拝:入母屋造 桟瓦葺	本殿棟札　昭和12年　大工宮島藤太郎				○	
木造 一間社見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 瓦棒葺	棟札２枚					
木造 一間社見世棚造 銅板葺		棟札２枚					
木造 一間社見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 桟瓦葺 向拝:縋破風 桟瓦葺						
木造 一間社見世棚造 鉄板葺	木造 切妻造 S型ｽﾚｰﾄ葺	拝殿：昭和46年					

A.　台輪無し　B.　直線肘木　C.　持送　D.　脇障子、彫刻有は彫　E.　拝殿せいがい造り

平成14年８月末日現在

建物名　屋根形式　屋根材　建築年代	建物名　屋根形式　屋根材　建築年代
本堂　鉄筋ｺﾝｸﾘｰﾄ造 鐘楼（四脚鐘台）　木造　入母屋造　銅板葺　弘化年間	方丈　木造　元禄10年 庫裏　木造　２階建　　文久年間
本堂　木造　入母屋造　銅板葺 昭和59年改築	鐘楼　木造　切妻造
本堂　木造　入母屋造　桟瓦葺	鐘楼門（四脚鐘台門）　木造　切妻造　桟瓦葺 薬師堂　木造　３間×３間　方形造　銅板葺　昭和59年
本堂　木造　入母屋造　桟瓦葺　昭和26年再建 向拝　２間縋破風	鐘楼（四脚鐘台）　木造　寄棟造　本瓦葺　明治７年 薬医門　一間一戸四脚門　平成６年
本堂　鉄骨造　入母屋造　桟瓦葺 昭和58年再建	
本堂　木造　寄棟造　鉄板葺 昭和54年再建	大師堂　木造　切妻造　鉄板葺き 棟札２枚
本堂　木造　切妻造　本瓦葺 昭和26年再建　棟札２枚	

3．三野町の各社寺建築

1）三所神社（表1－13）

鎮座地―太刀野山1774

［本殿］　木造　一間社流造　銅板葺

身舎―円柱　切目長押　内法長押　頭貫木鼻（獅子）
台輪　出組　詰組　二軒繁垂木
妻飾・虹梁　大瓶束

向拝―角柱（粽・几帳面取）　虹梁型頭貫木鼻（龍）
出三斗（皿斗付）　中備彫刻　繋海老虹梁
三方切目縁　擬宝珠高欄　木階五級（板）
腰組・出組（皿斗付）　脇障子（彫刻）

千木―なし　堅魚木―2本　（図8～11）

この社は河内谷川沿いに鎮座する。創建年代は不詳であるが、寛保御改神社帳に三所大明神の記述がある。

本殿は標準的な一間社流造りで、撫養石（和泉砂岩）積みの基壇に載る。

身舎部分は円柱を切目長押と内法長押で固め、柱頭部には獅子鼻付の頭貫と台輪が載る。身舎の組物は出組（一手先）で、柱間も同じ出組を備えた詰組形態である。妻飾はその出組の上に虹梁が載り、大瓶束で棟木を支える（図10）。

向拝部分は粽付の角柱を龍の木鼻付の虹梁型頭貫で固め、柱頭部を皿斗付出三斗の組物で構成する。また、丸桁から突き出した繋海老虹梁（図11）が身舎の頭貫に取り付く。三方切目縁は皿斗付出組の腰組で一手持ち出し、擬宝珠高欄と脇障子の構成である。木階は板階段の五級で昇擬宝珠高欄を備える。軒は繁垂木で正面二軒、背面一軒である。

この本殿は井川町などでよく見られる曲面加工を施さない直線肘木が組物のすべてに使われている。井川町井内にある馬岡新田神社、武大神社、八幡神社の各本殿は明治16（1883）年建立で直線肘木を多用しているが、和様や禅宗様などの様式に捕らわれない角材のまま用いる手法は明治期の自由さとも言えよう。今回の調査でも、この三所神社以外に芝生の武大神社、太刀野山の出羽神社と奥宮神社、清水西の宮内神社などでも見られた。県西部ではよく見られるこの肘木も県南部では見られないのは、大工の系譜と大いに関わりがあるものと思われる。

この本殿は直線肘木と彫りの深い彫刻から、明治期の建立と推察する。

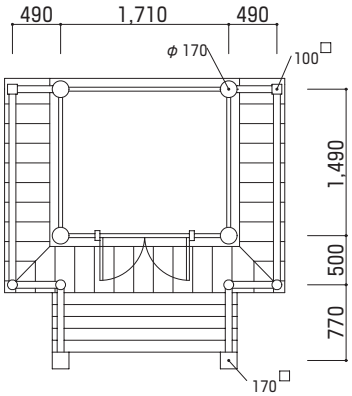

図8　本殿平面図

図9　本殿側面

図10　本殿妻飾

図11　本殿繋海老虹梁

2）出雲神社（表１－20）

鎮座地―太刀野山鎌窪

［本殿］　木造　一間社春日造　銅板葺

身舎―円柱(粽)　切目長押　内法長押　頭貫木鼻(象・獅子)　台輪　出組　中備蟇股(斗付)　彫刻板支輪　二軒繁垂木

妻飾・虹梁　大瓶束笈型付

向拝―角柱　虹梁型頭貫木鼻(龍)　出三斗(連斗付)　中備蟇股　手挟　四方切目縁　擬宝珠高欄(脱落)　脇障子(痕跡)　木階五級(木口)　腰組・持送

千木―垂直切２本　竪魚木―３本　（図12～15）

この社は町の中央部、太刀野山鎌窪に鎮座し、本殿は三野町で唯一の小規模な一間社春日造り、銅板葺きで、撫養石（和泉砂岩）の布積み基壇に載る。

身舎は粽付きの円柱で切目長押と内法長押で固め、内法長押と頭貫の間、四方に竹や菖蒲などの板彫刻をはめる。柱頭部には頭貫と台輪が載り、頭貫は側面に獅子鼻を、正面向拝側には象鼻が付く。台輪には木鼻がなく、その上部は出組で雲の彫刻板支輪を詰める。さらに柱間には波と雲の彫刻がなされた斗付きの蟇股を詰め、妻飾りは、出組で虹梁を受け笈型付の大瓶束が載る（図14）。

向拝部の取合いは、手挟とあおり板で納め、二軒繁垂木が取り付く（図15）。

向拝は几帳面取りされた角柱で、連斗付きの出三斗、虹梁型頭貫木鼻には錫杖彫りはなく龍鼻、中備の蟇股には身舎と同様の雲に加え菊の彫刻がみられる。向拝及び身舎の彫刻は素朴であるが丁寧に施されている。縁は痛みがひどく、四方に切目縁を回し、擬宝珠高欄が脇障子に取り付いたであろう痕跡が見られ、昇擬宝珠高欄に五級の木口階段が付く。

身舎柱と切目長押の取合い部に和釘（赤錆釘）が見られるなど、様式より現在の本殿の建立年代は、江戸末期から明治初期にかけてと推測される。

なお、拝殿も妻入りの入母屋造り（片入母屋）桟瓦葺きである。

図12　本殿全景

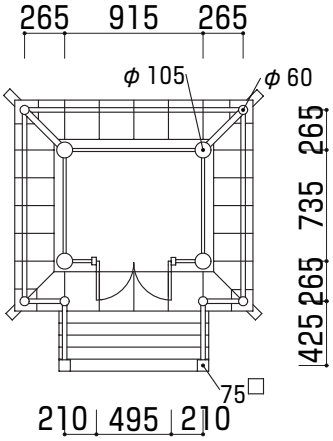

図13　本殿平面図

図14　本殿妻飾り・柱間中備彫刻

図15　軒部 手挟とあおり板

3）松尾神社（表１－９）

鎮座地―太刀野997

［本殿］　木造　一間社入母屋造　向拝・縋破風（すがるはふ）
　　銅板葺

身舎―円柱（粽）　切目長押　内法長押　台輪
　　頭貫木鼻（拳（こぶし）、獅子、象）　出組　詰組　中備彫刻
　　彫刻支輪　大瓶束笈型付（鬼面彫刻）
　　二軒繁垂木

向拝―角柱（几帳面取）　虹梁型頭貫木鼻（龍）　出三斗
　　蟇股　手挟　三方切目縁　刎（はね）高欄　脇障子（板）
　　浜床（はまゆか）

千木・鰹木―なし　　（図16～18）

この社は旧村社で町の西部にある太刀野の中条地区にあって、吉野川沿いの平地が行き詰まった讃岐山脈の山裾に鎮座している。寛保御改神社帳には「太刀野村　松尾三社大明神　祢宜太刀野村左衛門大夫」と記述があるが創建年代は不詳である。総代会長によると近年、地区の共有財産であった竹林が吉野川の河川改修の収用に係り、その資金を元に拝殿等を改築し本殿の修繕を行った。その時、棟札を探したが発見できなかった。また、文化年間に修繕を行った記録があったがそれも発見できなかったと伺った。

本殿は、今回調査を行った神社の中では唯一の入母屋造りで、向拝部分を縋破風とした平入りの一間社である。

身舎は、粽付の円柱を切目長押と内法長押で固め柱頭部には頭貫と台輪が載る。頭貫木鼻は平入り面の四方に拳鼻、妻面の前面側が象鼻、奥面側が獅子鼻の彫刻が施されている。組物は出組で中備に詰組を配し、組物間には中備彫刻、彫刻支輪で賑やかに仕上げている。入母屋屋根妻壁部（図17）も大瓶束に鬼面の彫刻を施し笈型付の賑やかなものとなっている。

向拝は几帳面取された角柱を錫杖彫りがある虹梁型頭貫で繋ぎ、木鼻には龍の彫刻が施されている。柱頭部は出三斗の組物を置き、手挟で身舎と繋いでいる。三方に切目縁を回し刎高欄が脇障子に取り付く。浜床を張っているが木階はない（当初からなのかは不明）。

建築年代は、本殿軒下に保存されていた鬼板（おにいた）の曳（ひ）き金具の赤錆状況からは明治期のものと考えられるが、様式では江戸末期の要素もあり今後の研究課題である。

図16　本殿全景

図17　入母屋屋根妻壁

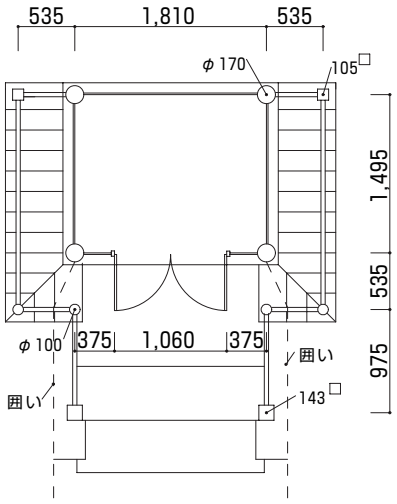

図18　本殿平面図

4）滝寺（表２－Ａ）

所在地―加茂野宮

宗派―真言宗御室派

山号―万念山　　院号―千光院

本尊―聖観世音菩薩立像（重要文化財）

［方丈］桁行16.54m　梁間10.11m　一重　西入母屋、東庫裏に接続　銅板葺（照屋根）
正面及び背面切目縁　角柱　一軒疎垂木
虹梁型頭貫木鼻
元禄10（1697）年建立

［庫裏］桁行16.60m　梁間8.45m　二重　広一間
軒唐破風玄関付き　角柱
文久年間（1861～64）建立
下層―角柱　寄棟造　一軒疎垂木　銅板葺
西は方丈に接続
上層―角柱　切妻造　一軒疎垂木　銅板葺

［鐘楼］角柱　一間四方内転四脚鐘台　二方（東西）
腰貫　内法貫　頭貫木鼻（獅子）台輪木鼻
柱頭部出三斗　柱間平三斗　一軒半繁垂木
入母屋造　銅板葺
弘化年間（1844～48）建立　　**（図19～23）**

吉野川北岸の西王寺高台にあり、宝美坊の別称がある滝寺は、平安時代前期の天長年間（814～34）、弘法大師の創建による古刹伝承がある。天正５年（1577）頃、長宗我部氏の兵火で消失。寛永２年（1625）火災、延宝７年（1679）洪水によって土砂に埋まる。元禄10年（1697）東側山麓から現在地に移し、宥義によって中興をはたす。桃山時代は日蓮宗に一時改宗されていたが、江戸期には再度真言宗となった。方丈は中興当時の建立であり、町内でも最古のものである。その後江戸時代末期の文久年間に方丈の東側に庫裏を建立し、弘化年間には方丈の南側及び本堂の東側に鐘楼を建立した。本堂は近年に鉄筋コンクリート造で改築された。それぞれの建立年代は、現住職からの聞き取りで、棟札等の確認はしていない。方丈と庫裏には時代をあらわすものはなく、鐘楼は折衷様式の建物である。

方丈は六室構成と、正面に一間幅の広縁を設ける標準的な方丈形式を見せる素朴な真言宗の方丈である。主屋の柱頭部などに、組物を省略している建物は、江戸時代中期の建物としては異例である。広縁の外側には、本堂に通ずる通路を兼ねた切目縁を設

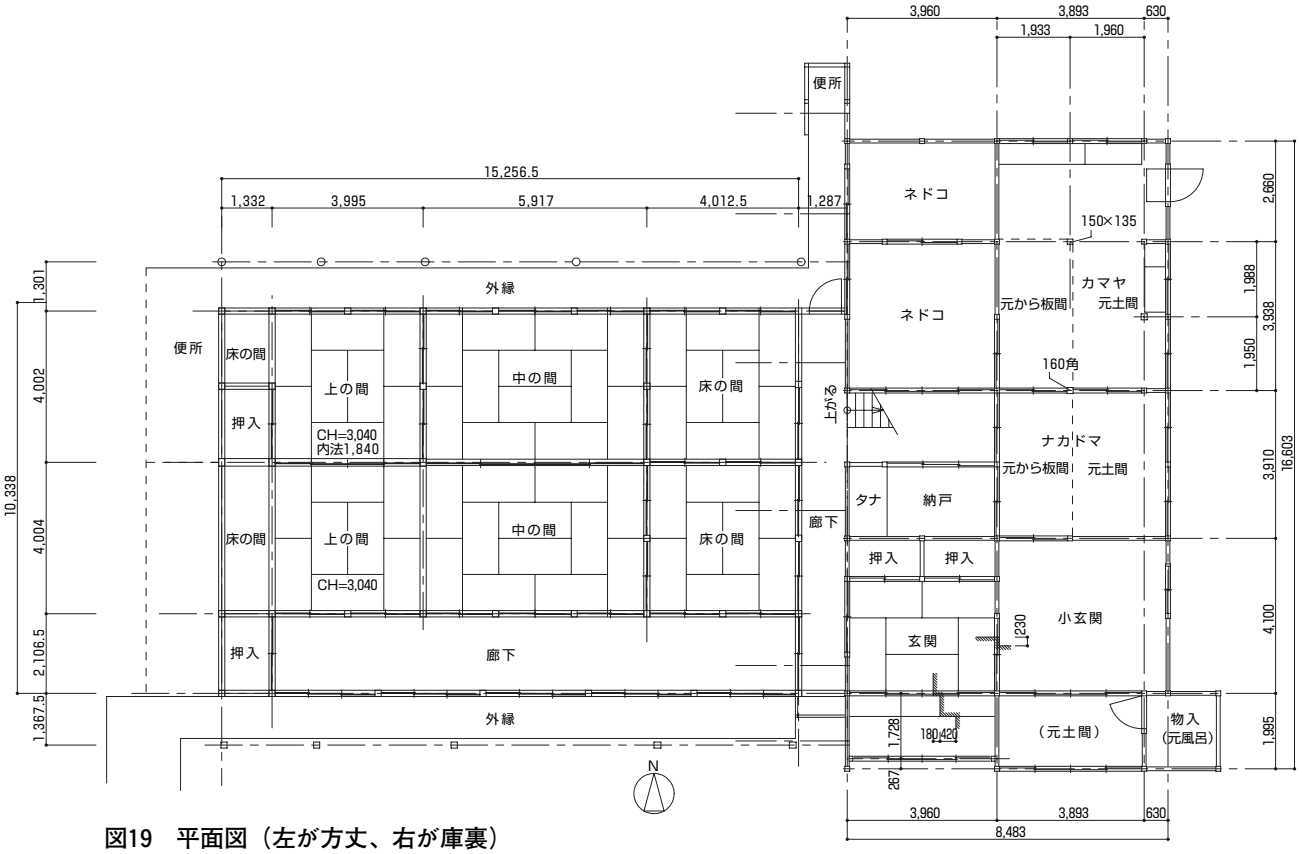

図19　平面図（左が方丈、右が庫裏）

け、その縁の外側に下屋柱を立て中央の柱間を広げ、この建物で唯一彫刻を施した虹梁型飛貫（図21）を渡し正面性を強調する。背面にも半間の切目縁を設けて、西側に付設した便所への通路を兼ねる。南北に付く建具はアルミサッシに取り替えられ、内部の障子や襖も建立当時のものではなく、天井も新しくするなど新建材による改修の跡が多く見られる。片入母屋の屋根は照屋根で、近年に銅板で葺き替えた。この建物の見どころは、建立当時の柱などを多く残すこと。建物の西列の前後に配置された「上の間」には、それぞれに床の間が設けられ格を付けること。庫裏との境の廊下天井に、本堂改築時に発生した内陣の格天井の一部が張られているなどがあげられる。特に天井が高く、間仕切りに欄間を有しないところは、時代の特徴をよくあらわしている。

庫裏は二階建てで、一階部分のみ調査を実施した。南に軒唐破風の玄関を付設した妻入りの建物である。初重は寄棟風の妻回しで銅板葺き。二重は照屋根の切妻で、ともに近年銅板に葺き替えた。土間部分はほとんど床が張られ、庫裏の特徴である煙出しは見られず、建具は方丈同様アルミサッシを入れるなど、内外ともに方丈以上の改修がされている。当初の面影を失い、原型復旧は困難な状態である。

鐘楼（図22）は、標準的な四方内転四脚鐘台で、伽藍内での建物群では唯一、柱頭部などに組物を有する本格的な建物である。内側に転んだ柱は面取りした角柱で、腰貫と内法貫で柱を繋ぐ。柱頭部は獅子の木鼻付きの頭貫と、木鼻付き台輪を置き、さらに出三斗と丸桁を載せて入母屋屋根を支える（図23）。柱間は中央に平三斗を填めて軒裏を賑やかに飾っている。屋根は入母屋造で、銅板を近年に葺き替えた。軒は一軒の半繁垂木、天井は豪華に一格一絵の格天井とし、中央に梵鐘を吊る。

鐘楼は、梵鐘を吊る楼造り（二階建て）が原型で、法隆寺や唐招提寺の鐘楼のように、総二階建てのものであった。その後、二階建てでも腰に板を張った袴腰の鐘楼が多くなり、近世になり簡素化したここのような一重の四脚鐘台が普及した。建物は変化しても呼称のみ残った。

図20　方丈（左）・庫裏（右）全景

図21　向拝虹梁型飛貫

図22　鐘楼　全景

図23　鐘楼　柱頭部組物

4．棟札

棟札は、建築年代の確定や、工事に関わった人物、また、建替えや修繕などの回数を知ることができる貴重な資料である。今回の調査においては、9ヵ所34枚の棟札を調査することができた（**表3**）。

調査場所と枚数及び最古のものは、以下の通りである。

14．奥宮神社　　14枚　元禄年間（1688~1704）
15．川花神社　　1枚　昭和18年（1943）
18．白石神社　　9枚　元禄8年（1695）
23．清水の山神社　1枚　昭和32年（1957）
24．西岡神社　　1枚　昭和12年（1937）
25．熊野八柱神社　2枚　大正13年（1924）
26．芝生の松尾神社　2枚　昭和23年（1948）
F．龍頭大師堂　　2枚　昭和7年（1932）
G．愛宕堂　　2枚　明治35年（1902）

一番多くの棟札を所蔵していたのは、奥宮神社で14枚であった。最古のものは年代が確実なものでは、白石神社の元禄8年（1695）のものであった。

寸法では、奥宮神社の享保18年（1733）のものが総高1200㎜で最大であった。最小のものは、松尾神社の昭和23年のもので総高362㎜であった。年代による寸法の特徴は見受けられないが、新しいものほど小さくなる傾向があった。

形状では、上部が山型になった尖頭型が22枚、水平となっている平頭型が12枚であった。平頭型のものは明治期から昭和30年代にのみ見られた。また、下部の隅を切り落とした鬼門切（きもんぎり）は腐食により判断できないものもあるが、ほぼ全ての江戸時代のものに確認できた。

棟札に書かれた人物では、江戸時代のものには藤原系の大工の名前がほとんど書かれている。また、明治27年の奥宮神社の棟札に千葉・佐賀山姓の大工が出てくるが井川町総合調査時に馬岡新田神社の棟札に太刀野村千葉春太・佐賀山重平の名前があった。同名ではなく10年余りの年代差があるので、その子孫と考えられる。技術面においても井川町で見られた組物の特徴である直線肘木の手法が伝承されていることが解る。棟札の確認ができなかった6社で同様の組物が使用されており千葉・佐賀山系の大工による造営と考えられる。明治初期の棟札を調査

表3　三野町の社寺建築の棟札

年代 西暦	年代 年号	番号		名称	建物など	大工	寸法 総高	寸法 肩高	寸法 上幅	寸法 下幅	寸法 厚さ	鬼門切り	現存建物
1688-1704	元禄	?	14	奥宮神社		大工藤原朝臣　不明	975	967	154	143	18	○	
1695		8	18	白石神社	再興	大工藤原朝臣西村三太夫　小工九兵衛	798	781	125	111	14	左	
1720	享保	5	14	奥宮神社	建立	大工藤原氏西内宇兵衛	1154	1123	200	140	13	?	
1733		18	14	奥宮神社		大工藤原氏太刀野村常兵衛	1200	1183	177	166	12	○	
1743	寛保	3	14	奥宮神社		大工加茂之宮　篠原源六尉守	545	535	105	98	11	○	
1750	寛延	3	14	奥宮神社	造立	大工藤原青木常左衛門　藤原住源六政次　小工藤原善次郎	1017	997	159	135	18	○	
1768	明和	5	14	奥宮神社	修復	大工藤原利□　青木作吉	1062	1050	170	140	16	?	
1779	安永	8	14	奥宮神社	修復	大工　藤原利八　与作	1104	1092	162	142	17	○	
1802	享和	2	14	奥宮神社	再興	大工大西安兵衛忠義	1109	1088	164	143	25	○	
1803		3	18	白石神社	再興	大工藤原吉五良吉春　小工藤原伊代治正清	727	717	126	107	14	左	
1839	天保	10	18	白石神社	再興	大工藤原長之輔　同　喜閏太夫	732	721	128	108	14		
1851	嘉永	4	18	白石神社	上□	太刀野村藤原竹助	736	730	121	99	14	右	
1868	慶応	4	18	白石神社	再興	大工藤原利喜他　同　市太	729	722	127	99	12	右	
1894	明治	27	14	奥宮神社	再建	大工　佐賀山文平　小工吉岡佐平、田岡久太郎、佐賀山安平、千葉藤吉　木挽林多平	966		180	150	19		○
1901		34	18	白石神社	?	棟梁大工松浦藤蔵、長谷安蔵、松浦時蔵、林佐三郎、木挽田中清蔵	845		146	105	14		○
1902		35	G	愛宕神社	再建	大工　藤岡参蔵	513		102	78	16		
1917	大正	6	18	白石神社	再建　鳥居	大工　久保鹿蔵	728		142	126	12		
1924		13	25	熊野八柱神社	葺替　本殿	大工　田岡久太郎	543		108	92	9		
1930	昭和	5	14	奥宮神社	上棟　地神社拝殿	大工　七田佐平	549		112	100	20		
1931		6	18	白石神社	本殿銅板葺換	大工　宮本条太郎　銅細工安宅利作	850		165	131	15		
1932		7	F	龍頭庵大師堂	再興	大工　香川県　和良地佐市	544	537	118	98	19		
			14	奥宮神社	葺替　本殿	大工　佐賀山文平	909		177	151	19		
1933		8	25	熊野八柱神社	木造鳥居	大工　長谷作治郎　大島国市	419	410	90	77	8	○	○
1937		12	24	西岡神社		大工　宮島藤太郎	570		111	101	16		○
1943		18	15	川花神社	再建	大工　岡田宅郎	605		149	107	18		○
1948		23	26	芝生　松尾神社		大工　木下佐平　木下半平	362		89	71	7.5		
1951		26	G	愛宕神社	改築	大工　山田繁男	753	745	146	120	14		○
1957		32	23	清水　山神社	再建　拝殿	請負人　重清西村　田中繁興	564		100	99	16		○
1967		42	14	奥宮神社	拝殿屋根葺替	工匠　真鍋武義	880	830	177	153	12		
1971		46	18	白石神社	本殿玉垣修築	大工棟梁　大岡多平	753	741	135	120	10.5		
1973		48	14	奥宮神社	本殿屋根葺替	工匠　西岡誠一	915	899	109	89	17		
1979		54	F	龍頭庵大師堂	奉新建	大工　芝生　尾花春芳　加茂野宮　土井喜一	567	538	118	94	16		○
1982		57	26	芝生　松尾神社	本殿修理	大工　木下兼夫	380	363	105	77	8	○	○
不明			14	奥宮神社	再興	大工　團勝蔵信安　江戸時代のもの	992	970	158	140	30	?	

することができなかったので、師弟関係が解明できなかったのが残念である。

讃岐山脈の南斜面側の山間部では香川県の影響を受けた特徴を持つ建物が見受けられるが、龍頭庵大師堂の昭和７年の棟札には、香川県の大工の名前が書かれており、このことを裏付ける一つの資料となると考えられる。

５．おわりに

今回の調査で、神社建築については拝殿のせいがい造り、直線的な肘木、台輪が省略されているという３つの大きな特徴を見い出すことができた。

また、清水の八幡神社をはじめ、修繕、改築されている神社が多く見られた。しかし、太刀野山の出雲神社などは徳島県では数少ない春日造りの本殿で、年代的にも様式から判断する限り、江戸末期から明治初期にかけてのものと推測される貴重な建築であるが、傷みが激しく、このままにしておくと朽ちていってしまうので、修理、復元されることが強く希望される。

図24　長好寺鐘楼

その際、修理方法も新しい材料で造りかえる大規模な改築ではなく、旧来の部材をできるかぎり残して､旧来の様式にしたがって復元してほしいと思う。寺院建築については、昭和期に新しい様式で改築、修繕されたものが多く、建立当時の姿を残す物が少なかったのが残念であった。その中でも、滝寺と光泉寺の鐘楼が建立当時の様式を残しており、これからも維持保存をお願いしたい。

また、今回最後に調査した長好寺では、柱に自然木を使った切妻屋根の素朴な鐘楼（**図24**）に出会えた。

最後に、今回の調査において、多くの町民の方々に親切に場所を教えて頂いたり、神社、寺院に関するお話を聞かせていただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

文　献

三野町誌編集委員会（1974）：『三野町誌』三野町役場。

徳島県神社庁教化委員会（1981）：『徳島県神社誌』徳島県神社庁。

徳島県三好郡郷土史研究会（2001）：『三好郡のお堂とお庵』三好郡行政組合。

岡島隆夫（1999）：『阿波の神々と祭り（二）』。

「角川日本地名大辞典」編纂委員会（1986）：『角川日本地名大辞典　36　徳島県』角川書店。

（社）徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会（1997）：『阿波の社寺建築』阿波のまちなみ研究会。

郷土建築研究会（1998）：『総合学術調査報告　井川町　阿波学会紀要第44号　井川町の社寺建築』徳島県立図書館。